

【別紙2】

大阪市立長橋小学校 令和元年度 校長経営戦略支援予算 【基本配付】 実施報告書 (補足説明資料)

本校では、「小学校経年調査における正答率が市平均の7割に満たない児童の割合を同一の母集団と比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる」こと、そして、「本年度末に学校が実施する全学年児童対象の生活アンケートで「将来の夢や目標がある」「どちらかといえばある」と答える児童の割合を85%以上にする」ことを年度目標とし、年度目標に応じた事業効果を測る指標として、「児童への学習アンケート(4・10・2月実施予定)の国語科・算数科に対する「わかる」「どちらかといえばわかる」と答える児童の割合を7割以上にする」ことや「生活アンケートの「将来の夢や目標がありますか」で肯定的な回答をする児童の割合を85%以上にする」ことを設定した。

上記を達成するために、以下の2つの取組を行った。

1. 取組内容（1）について

1-1. 取組を実施する必要性

本校では、平成30年度の全国学力・学習状況調査では、国語AB・算数ABとも大阪市平均を下回っている。また、平成30年度小学校経年調査の標準化得点においても大阪市平均を示す「100」に届いている学年がなかった。

遅刻・欠席が多いなど生活環境の影響を受けていたり、発達の課題等により、学習の遅れがあったり、基礎学力の定着に深刻な課題を抱えている児童が多数在籍している。また、不規則な生活から授業に集中できず、学習の遅れがますます広がるなど、個別の課題が山積している。

さらに、学力に課題のある児童は、自尊感情や自己肯定感が低下し、将来の夢や目標を持てずにいる傾向が強く、生活・学習における意欲も低い状態にあることから、意欲を向上させるための授業の工夫やさまざまなとの出会いを通して「生き方」を学ぶ機会、「ほんもの」にふれる体験型学習が必要と考えた。

上記の課題を解決するために、教育振興基本計画における「施策2 道徳心・社会性の育成」の一環として、「①国語科の授業研究及び研修会の実施」、そして、「②校外における多様な体験学習の実施」、また、「③芸術鑑賞の実施（音楽）」、「④ゲストティーチャーを招いて行う聞き取り学習及び体験学習」を行った。

1-2. 取組を実施することにより期待できる効果

国語科の授業研究及び研修会を充実させることで、教員の授業力向上と授業の工

夫につながる情報収集が進むと期待できる。また、校外における多様な体験学習や芸術鑑賞、ゲストティーチャーを招いて行う聞き取り学習及び体験学習は、出会いを通して自分を振り返る機会になるなど、将来の夢や目標の選択肢を広げることにもつながることが期待できる。

1－3. 具体的な実施内容

具体的な実施内容としては、下記のとおりである。

① 国語科の授業研究及び研修会の実施

6学年による国語科全体授業をはじめ、教員全員が最低1回の授業を行い、全体授業については、大学から講師を招いて指導を受けた。また、国語科の研修会では、講師を招いて先進的な教育実践を学ぶなど、教員の授業力向上につながる内容が実現した。

② 校外における多様な体験学習の実施

3年生の社会科の学習で大阪環状線とハルカス展望台の社会見学を実施し、自分たちの住む町の様子を観察したり、働く人にインタビューしたりして、多様な体験ができるよう活動を充実させた。

③ 芸術鑑賞の実施（音楽）

本年度は、音楽鑑賞会を実施し、実際に楽器を演奏したり、リズムに合わせて体を動かしたりして、音楽の魅力に親しんだ。また、指揮者体験は、貴重な経験となり、オーケストラが美しい音色を響かせる魅力を体感することができた。

④ ゲストティーチャーを招いて行う聞き取り学習及び体験学習

国際理解教育や性・生教育、LGBT、障がい者理解など、さまざまな人を招いて直接話を聞き、疑問や感想を伝えることで正しい理解につながる活動を行った。また、車いすや民族楽器など、「ほんもの」に直接ふれ、五感を活かした体験活動を行うことで、記憶に残る学習にすることができた。

1－4. 取組に対する達成状況（A～D）及びその評価理由

・取組に対する達成状況：B

・評価理由：

取組内容①においては、授業研究や研修会後のアンケートで教員から授業力向上の手ごたえを感じたなどの感想が聞かれ、次の機会を期待する声が多くあった。また、授業に対する児童の感想も肯定的意見が大半で授業改善は確実に前進していると考える。

また、取組内容②③④においては、体験後の児童の感想で肯定的な意見に加え、さまざまな人との出会いを喜ぶ姿が毎回見られ、「やってよかった」と思える活動が多かった。

しかし、生活アンケートにおいて、将来の夢や目標に 7 割ほどの児童しか肯定的に答えておらず、取り組みの継続が今後も必要であると感じた。

以上の成果から、B 評価とした。

2. 取組内容（2）について

2-1. 取組を実施する必要性

本校における課題には、学力差による学習意欲の低下や授業への集中力の持続のける問題があり、習熟等による少人数授業をさらにT. T 体制で行うなどの個別支援が必要な状況にある。

上記の課題を解決するために、教育振興基本計画における「施策5 子ども一人ひとりの状況に応じた学力向上への取組」や「施策8 施策を実現するための仕組みの推進」の一環として、「①学びサポーターの活用」を行った。

2-2. 取組を実施することにより期待できる効果

国語、算数を中心に学びサポーターを 3 年生以上に配置し、少人数指導におけるT. T 体制をとることで、学力に課題のある児童に支援を行うことが期待できる。また、支援が充実することで、学力の向上が図れるだけでなく、学習意欲を維持することにもつながると期待できる。

2-3. 具体的な実施内容

具体的な実施内容としては、下記のとおりである。

① 学びサポーターの活用

算数や国語の授業において、児童の学習支援にサポーターがあたり、学習のつまづきへの助言や意欲を持続させるための言葉がけを行った。また、学習プリントの印刷や簡単な答え合わせなどもサポーターが担い、学級担任が個別指導をしたり授業の準備をしたりできるようにした。

1-4. 取組に対する達成状況（A～D）及びその評価理由

・取組に対する達成状況：B

・評価理由：

取組内容①においては、授業における効果的な支援が実現し、個別指導の充実や児童の学習意欲の向上にもつながった。また、学級担任が多くの児童の支

援にあたるとともに学習の習得状況の丁寧な確認にもつながり、個別指導に必要な準備も整えやすくなった。

しかし、サポーターの配置時間や人員が十分と整えられなかつたことは今後の課題である。

3. 総論

2-1. 年度目標の達成状況、総評

本校では、上記の取組を実施することにより、「小学校経年調査における正答率が市平均の7割に満たない児童の割合を同一の母集団と比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる」という年度目標に対して、3学年中2学年が大幅に減少し目標を達成したものの、1学年が達成できなかつた。そして、「本年度末に学校が実施する全学年児童対象の生活アンケートで「将来の夢や目標がある」「どちらかといえばある」と答える児童の割合を85%以上にする」という年度目標に対して、肯定的意見の児童の割合は79%で、目標の85%以上に届かなかつた。

また、年度目標に応じた事業効果を測る指標として、「生活アンケートの「将来の夢や目標がありますか」で肯定的な回答をする児童の割合を85%以上にする」ことを設定し、これに対して、肯定的な回答をする児童の割合は1回目が84%で2回目が79%であり、目標の85%以上には届かなかつた。そして、「児童への学習アンケート(4・10・2月実施予定)の国語科・算数科に対する「わかる」「どちらかといえばわかる」と答える児童の割合を7割以上にする」ことを設定し、これに対して、国語科・算数科に対する「わかる」「どちらかといえばわかる」と答える児童の割合は、国語で平均87%、算数で平均87%であり、目標の7割以上を達成した。

以上の結果から、年度目標に対する達成状況を「C」評価とした。

これは、取組により、児童の学習に対する意識に好ましい変化が見られたものの、学力経年調査の結果や生活アンケートの結果で目標をすべて達成できなかつたことは、取組内容が一時的な効果に留まっていたのではないかと考えられる。本当の意味での「やってよかった」は、数値的な向上や目標達成において評価すべきであり、それらの結果を受け、「C」評価が妥当であると判断した。

2-2. 学校協議会における意見

本校における取組（1）（2）に対し、そのねらいと効果、今後の計画についておおむね理解いただけた。また、さまざまな取組を進めているにもかかわらず、目標に至らなかつたことは残念であるが、学校がめざす教育の方向性については支持をいただけた。